



賢者

の恋

賢者の恋

賢者の恋

BOUKYAKU BATTERY
UNOFFICIAL FAN BOOK No.7
Haruka×Kei
SARAWARENAI

ATTENTION

執筆時点の原作最新話は98話

捏造表現を多く含みます

暴力的描写(流血表現等)・軽度の性描写を含みます

大きな括りとしては葉流火×圭ですが
智将→葉流火要素が非常に強いです

前作(True Love Waits)の続きの時間軸の話に
なっておりますが単品でも読めます

本作品は二次創作です。出版社様・原作者様とは一切関係ございません。
無断転載及びフリマアプリやネットオークションへの出品を禁じます。



サ
ア
ア



俺は
本当に
愚かだ



だって俺は
消えるんだから

こんな感情を
持ち続けても

余計惨めに
なるだけ
なのに

ア
ア



俺は
葉流火の
ことが

賢者の恋





俺の名前は
要圭

「智将」とも
呼ばれている

……とまあ
それは
いいとして

ある日
目が覚めると

記憶
戻ったっ
て……

マジで
催眠術の
せいかな？

清峰くんも
心当たり
ないんだ……

俺のことは
もう
いいから

おい

バそんな
バかな

少々
厄介なこと
なつていたに

うん……

















…葉流火は

俺がアホで
怠情なまま
でも

別に
良かった
ことな
んだ
って



かつての
努力が
あつたから

今の葉流火から
その言葉が
出てくるのだと

俺は
思
つ
た
が



存外
その

「圭は圭」
という
言葉は

俺に重く
伸し掛
かった



俺と
葉流火は

いわゆる

幼なじみと
いうやつだ



葉流火の
才能は

非凡
だった



出会う
す

野一
緒に
始
めた

まあ
そこまでは

良くある
話かも
しれないが











だが時間が
経つにつれ

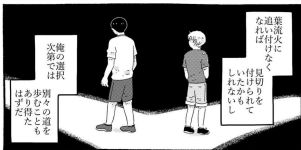
俺たちの
関係は

確実に
変化も
していた









それでも俺は
他の誰でも
なく

葉流火と
一緒にいた

葉流火に
必要とされなく
なるのだけは

嫌だった

身の丈に
合わなく
ても

葉流火を
導ける存在で
あったかっ

この世に
蔓延る
理不尽や

悪意や
無責任から

守って
やりたかった











その
純粹さに
直面して

俺は俺の
「好き」が

葉流火の
それと
同義なの
かを
疑った



俺の
「好き」の
根底には

天才である
葉流火に
好かれること
で

自分の
承認の
欲求を
満たした
という

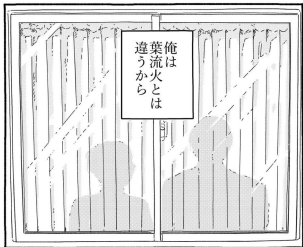
浅ましい
気持ち
が
存在
しない
か？



葉流火の
ためなら
何でも
できる
と思
っている
のも

「葉流火が
好きだから」
という理由
以外に

もっと
打算的な
部分
がある
んじゃない
か？





「バツテリー」
として

葉流火の
気持ちを受け入れた



「恋人」ではないが

野球の
ための

自分たち
独自の
関係性



そう
やって

葉流火が俺を
好きでいる
ことを許した



あくまで
野球が第一

葉流火の
コンディション
維持のためなら
俺は
何だって
すると
伝えた



俺たち
2人にとって

「野球」は
全ての中心
だったから

それを利用して
免罪符のように
してしまった



中途半端な
ことをする
くらいなら

ここで拒絶
してやる
べきだった

良き友人で
いるべきだった

そんなことは
俺にだって
分かっていてた



突き放せ
なかつた



それに
なのに



葉流火の
「好き」に
真摯に向き合う
こともできず

かと言って
手放すことも
してやれず

未来の自分に
結論出しを
押し付けて

葉流火を
手に入れた
気になった



その代償が
いずれ
跳ね返ってくる
ことなんて

火を見るより
明らか
だったのに



それでも
俺は

その
選択をした

きつと何度
やり直したって
そうしたはずだ



そのくらい
葉流火が
欲しかった



2人で
色々な
ことをした



絶対に
言えない
ようなことだ



俺も
なんでも
してやりたく
なった

はあ

俺たちは
幼なじみで

ずっと一緒に
いたはずなのに

はあ

初めて
知ることが

沢山
あった

はっ

どんどん

後戻り
できなくなっ
ていった



























勿論
それが

仕方のない
ことだと
分かっては
いた



でも
その時の
笑顔は

「打倒智将
要主」を
肯定する表情
でしかなかった



だって
葉流火に
とつては

目の前に
見えている
「要主」が

全て
なんだから







今は
俺の

すび
すび

いわば

意識だけの
存在



自分の
意志で

現状を
変えられ
ないのが



さび
さび
バイモ

もどかしくて
仕方なかった



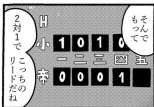
あれから
「アホ」との
入れ代わりも
なければ

すかー

すびー

こちらの存在が
認識される
こともなかった

















チームメイトと
良好な関係を
築けている
ようだ



俺アホの



シニアの
時の俺は
葉流火以外の
チーム
メイトと

あんな風に
笑い合った
ことなんて
あったら
うか



なんでも
ねエよ

いや



……どしたの
オレオレ







リードしたまま
9回裏…

H
小
幸

1	0	1	0	0	1	0	1	0
一	二	三	四	五	六	七	八	九
0	0	0	3	0	0	0	0	

スゲーツ！





はじまる
みたいだよ



























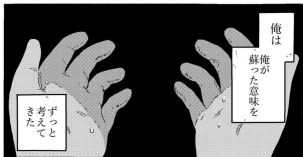


























そして

ポン



「アホ」の方の
記憶から
推察するに

とある
タイミングに
乗じて……

人格を
完全に
分けた



その際に
不要になった
「智将」の人格は

要主の
本体から
切り離され

休眠
させられ
ていた



同じく
不要になった

野球の
記憶と
一緒に















大局的に
見れば
その方が

「要主」が
葉流火の隣に
居続けられる
可能性は
上がるんだし…

「智将」の
存在は
いわば

失敗の記録の
集合体みたいな
ものだ

そういう
意味では
価値がある
同じ轍を
踏まないように
対策が
できるからな

それで…

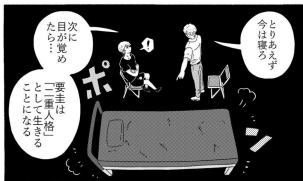
「アホ」に
必要な
記憶だけを
伝えて

本体にとって
本当に不要に
なった時…

今度こそ
俺は消えるん
だろうな









現在の
「アホ」からも
「智将」からも

欠落してる
記憶がある

記憶喪失……
というか
人格の分離の
真相に関わる
ものだ



まあ
脳のどこかに
存在は
するん
だろうが……

何故それを
引き出せない
のか現状は
分からない

もしかしたら
それ自体にも
意図が
あるかな



「智将」は

でも
不確定要素が
あるって
ことは

軌道修正も利く
かもしれない
ってことだ

確かに一度
不要になったの
かもしれないけど
今後も
そうとは
限らないって
俺は思う



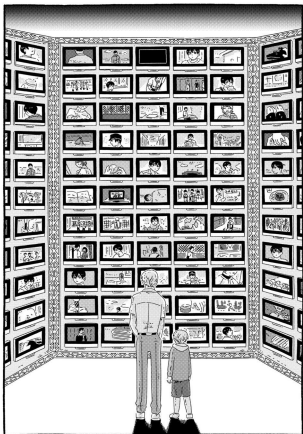






















葉流火

絶対に

「要^俺圭」が
守ってやる
からな







葉流火と
「そういう関係」
になったのは

シニア時代に
なってからの
話だから

その記憶も
基本的に
俺側には
ないはずだ



俺が
消えれば

俺の
記憶も
一緒に
消えるの
だろう



それに
俺は

「智将」で
在り続ける
原動力として

葉流火への
気持ちから
使ったから















だって全部
抱えて消えれば

少なくとも
それは

叶うもんな



…違う

だって
あいつが
本来の
要主なんだ

だから
俺は
あいつと
葉流火を

真っ当な
「友だち」
に…



何
ってんだ

お前
本当は
さあ

葉流火に
自分を

選んで
欲しくて

どうしようも
なかった
だろ？





「智将」の
ままで

清峰
葉流火と

ア
マ
ー
ン

将来も
ずっと一緒に
いられる夢

あのさ

「圭は圭」で
片付け
られて

ほんとに
悔し
かったろ

違う

自分の
努力を

葉流火への
愛情を

植取りされた
みたいでさ

…違う



お前自身
だよ！

俺はさあ
お前が抑圧
し続けてきた



認めろ

ちゃんと
存在するんだ



自業
自得だ！

本当に
消える羽目に
なるんだよ

そうやって
自分を
殺し続けるから





















何かを
成し遂げるには
犠牲が必要で

実際「要主」は
様々な物を
切り捨てながら
生きてきた

今度はその対象が
出来損ないの
「智将」という
人格になっただけ

そこに
俺の願望は
関係ない



全部
仕方のない
ことなんだい

捕手

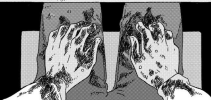
野手

セン

フ



俺は間違っ
ないよな？





全部

本当のこと
なんだな

もう

やるしか
ないんだ

俺は

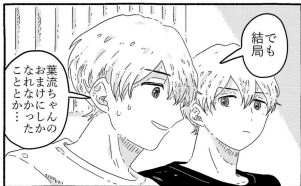
「智将要生」
なんだから…





























み

ん

シ
シ
シ

みん

あ

圭

みん

ちやうど
良かった

みん

みん

み

うん

おう
行こう

うん

お前も
ランニング
か？

なんだ
葉流火

おはよう

一緒に
走ろうと
思っ

ん



俺が

こうして
葉流火と
走るの

思えば
すごく
久しぶりだ



ずっと

これが
当たり前
だったの



もう

遠くない
未来に

出来なく
なるんだな







み



俺が圭を
好きなこと

ん

み
ん



み

み

ん

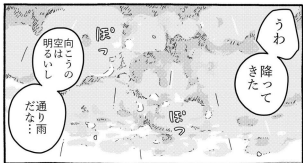




























サ
ア















自分の
本心が

少しは
分かったか？

その
なの

ずつと
分かつ
てた

だって
葉流火に

ちよつと
俺を認めて
もらえた
だけでこれだ

馬鹿
だよな

俺

嬉しい
んだ

俺だって
本当は

「智将」^俺の
ままで

選ばれ
続けたし
かったし

ずっと
あいつの

隣に
居たか
った

葉流火が
好きだ

絶対に……

絶対に

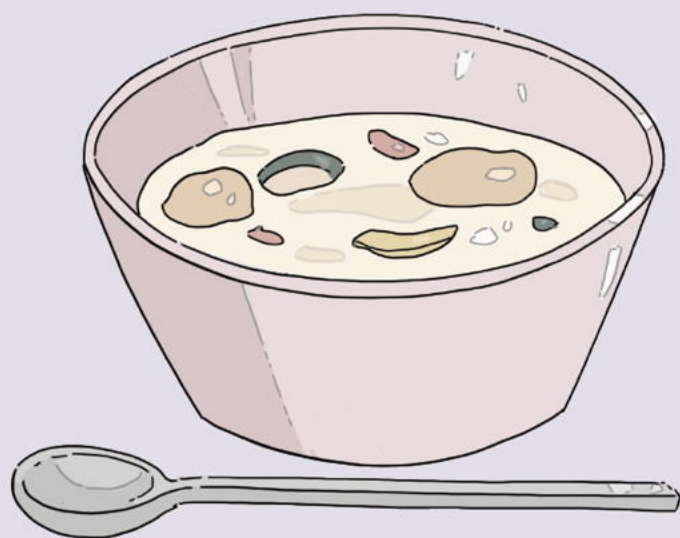
誰にも
渡したく
ない！











SARAWARENAI

BOUKYAKU BATTERY
UNOFFICIAL FAN BOOK No.7

220321

